

## 郷土の偉人から学ぶ

校長 館岡 靖哲

まだまだ寒い日もありますが、陽の光に春の気配を感じる季節となりました。3月の別称は、「弥生（やよい）」です。「弥（いや）」は「いよいよ、ますます」、「生（おい）」は「草木が生い茂る」という意味があり、冬が終わって草木が芽吹き生い茂る季節を表現しています。さて、3年生はすでに特別の日課となり、まもなく卒業式の練習も始まります。思い起こせば、コロナ禍での入学式、その後も多くの制約の中での学校生活が続きましたが、明るく、前向きで、何事にも一生懸命に取り組む姿が印象に残ります。これから先、どんな困難なことに直面しても、皆さんなら乗り越えることができると確信しています。

ところで、1年前の学校だより（令和6年3月号）にて、中央区出身の偉人、『武井 武（たけい たけし）』を紹介しました。武井さんが発見したフェライトにより、我が国のエレクトロニクス産業は目覚ましい発展を遂げました。武井さんの功績は非常に大きく、文化功労者顕彰や与野市名誉市民顕彰（与野市では第1号、さいたま市でも継承）を受けています。ここでは、もう一人の中央区出身の偉人を紹介いたします。それは、『稲垣 田龍（いながき でんりゅう）』です。

稲垣田龍（1789～1861）は、江戸時代後期に鈴谷村下組の名主・稲垣新左衛門の子として生まれました。妙行寺に残る墓碑銘によると、幼少から剣術や柔術に関心を持ち、江戸で修行に励み、36歳の頃には一角の武道家として名を轟かせていたようです。こうして武道修行に精進する一方で、西洋流の天文学や暦学などを学んでいきました。当時の天文学は占星術の意味合いが強く、天の異変を観測・記録する程度の発想であったと伝えられています。稲垣は天体観測を行う中で、当時の蘭学者が紹介していた「地動説」に共鳴するようになりました。参考までに、地動説を唱えたガリレオ・ガリレイが1632年、地球が動くという旨を書いた著書『天文対話』を発刊し、それに対する罪で1633年に裁判が開かれ、有罪が告げられました。その時につぶやいたとされる「それでも地球は動いている」が有名ですね。話は戻りますが、江戸時代は幕府が鎖国を実施し、情報が乏しかった時代です。その時代に自ら観測を重ねる中で当時最先端であった「地動説」に共鳴し、最新の宇宙観を吸収しつつ人々にこの知識を広めていきました。

さて、さいたま市は「宇宙のまち さいたま」というプロジェクトを立ち上げています。市のHPより、稲垣田龍に係る部分を紹介いたします。

田龍の活躍から約200年後、さいたま市に再び宇宙にあこがれる人物が現れました。

皆さんご存知の宇宙飛行士若田光一さんです。

稲垣田龍という人物が江戸時代のさいたま市にいたからこそ、後に若田さんが宇宙に興味を持ったのかもしれませんが。

与野郷土資料館web解説（その34）より

稲垣田龍は、「物を大事にして奢りを省き、弟子を導くのに徳行を行い、身をもって範を示す」ことで、村人の模範となる生活を送ったそうです。時代は変わっても、その人となりは学ぶことが沢山あると思います。本校より、郷土の偉人に名を連ねるような人物がでることも私の楽しみの一つです。

（参考文献：与野人物誌 与野市教育委員会）